

UNIT	テーマ	内容	対応する既存文法事項と問題点
0	<p>● <b>エッセンス講座</b> :Orientation VSOPメソッドへの導入講座</p> <p>人間は、物や人を表すのに、4通りの表現の仕方がある。品詞の制限があると、言葉は使えない。話し手の判断(V1)は、[V1+V2]の2つの部分で構成され、V1は判断詞」V2は判断内容語」と考える。</p>	<p><b>do・be・haveを使った 四つの基本ロジック</b></p> <p>do・be・haveは 助動詞のような記号的な言葉」VSOP英文法では <b>判断詞(V1)</b>と呼ぶ。</p> <p>何がどうする。 動詞 [do] Verb 何がどんなだ。 形容[動]詞 be + □□ 何が何だ。 形容詞 be + 名詞 何には、何がある。存在、所有を表す。 have + 名詞</p>	<p>do :助動詞 be :本動詞・助動詞 have :他動詞 [問題点] ⇒ 品詞名が違うので 働きも違う」と思ってしまう。</p>
1 be ①	<p>● be □□ :形容詞 ・人の状態、気持ち、状態</p>	<p>I <b>am happy</b> with my progress in English. I <b>am sure</b> of my success in the future. I <b>am ready</b> for any job in the world.</p>	<p><b>be + 補語</b> [問題点] ⇒ 意味の中心になっている言葉を「補う語」と呼ぶ。</p>
2 be ②	<p>● be □□ :a 名詞 ・人の性質、性格、種類</p>	<p>I <b>am a tourist</b> from Japan. I <b>am a serious person</b> of few words. I <b>am a problem solver</b> and innovative idea generator.</p>	<p><b>be + 補語</b> [問題点] ⇒ 意味の中心になっている言葉を「補う語」と呼ぶ。</p>
3 be ③	<p>● be □□ :前置詞句: ・人の場所、人の状態 具体的な意味と 抽象的な意味の使い方の違い</p>	<p>I <b>am at my desk</b> in the office. I <b>was with Tomo</b> at a coffee shop. I <b>am in the mood</b> for <i>sushi</i> for lunch. I <b>am in a hurry</b> to get the blog up and running.</p>	<p><b>be + 修飾語 又は 熟語(イディオム)</b> = be動詞が存在を表すとなっているので文法的説明ができない。</p>
4 be ④	<p>● be □□ :副詞 : ・人の状態、位置の変化 in, out, up, on, off</p>	<p>I <b>am in</b> for a real treat. I <b>am up</b> for a drink tonight. I <b>am out</b> of shape due to drinking too much alcohol and eating bad food. I <b>am behind</b> on my car loan. What should I do?</p>	<p><b>be + 修飾語 又は 熟語(イディオム)</b> 「be動詞が存在を表す」となっているので文法的説明ができない。</p>
5 be ⑤	<p>●判断語の間は <b>補助的な判断</b>を言う<b>重要な場所</b>:{Mid} ・この場所で使う言葉に、品詞の制限はしていない。</p>	<p>●程度 …… very, little, much, too, almost など ●頻度・回数 …… often, sometimes, once, always ●方法 様子 …… so, well, slowly, fast, hard など ●否定 …… not, never, seldom, hardly, scarcely, no longer</p> <p>I <b>am always</b> happy with you now. I <b>am always</b> a good husband for you. I <b>am no longer</b> in office for a reason. I <b>am three payments behind</b> on my car loan.</p>	<p><b>頻度・程度を表す副詞</b>は、「一般動詞の後ろ、be動詞の前」 [問題点] ⇒ この場所で使う言葉を「副詞」と呼ぶので、副詞以外が使われている場合がよく分からなくなる。名詞も動詞もこの場所で使っている。また、副詞が名詞を修飾する使い方ができる。定義矛盾。</p>
6 be ⑥	<p>●説明語(M)と叙述語(P)の使い方 :<b>ネクサス ①解説</b> ・名詞の後ろの説明語 ★具体的な名詞 + [be] + □□ ★名詞の後ろで説明語で使う言葉に品詞の制限は無い ⇒ be が抜けると説明語(M)になる。 形容詞、前置詞句、副詞、名詞」が名詞の後ろで皆同じ使い方をする。</p>	<p>いろいろな言葉のネクサス ① The man, <b>CEO of the company</b>, is very fat. ② The man <b>happy</b> with weight loss, ③ A fat man <b>out of shape</b> can be one of the all-time greats. ④ The baby <b>in front of me</b> was looking straight at me.</p> <p>●英語のネクサス :名詞-[be]-V2-O V2に使う言葉に品詞の制限は無い。 ③の使い方は今までの解釈法だと「副詞の形容詞用法」になる。</p>	<p><b>同格名詞、又は、後置修飾語 ⇒ 形容詞句</b> [問題点] ⇒ 呼び方がバラバラなので異なる表現だと思ってしまう。また、副詞も名詞の後置修飾になるので「副詞の形容詞用法」と呼べるような矛盾した言葉の使い方となる。</p>

Unit	テーマ	内容：	対応する既存 文法事項と問題点
7 be ⑥	<p>●裏ワンパターン②練習</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的な名詞の後ろに説明語を使う練習。</li> <li>・日本語と逆な語順に慣れる。</li> </ul>	<p>●英語のネクサス :名詞-[ be ]-V2-O。</p> <p>名詞の後ろに説明語が付く語順が日本語と逆になっているのが、英語に馴染みにくい最大の原因になっている。</p> <p>判断語(V2)に使う言葉に品詞の制限が無いのと同じように、説明語(M)で使える言葉にも品詞の制限がない。品詞で分類して解釈しようとする と英語が理解できなくなってしまう。</p>	<p>後置修飾の場合、日本語と語順が逆になるが、文法嫌いになった人は、この逆の語順に慣れず、結果として、英語の理解を諦めがちである。</p>
8 Verb ①	<p>●基本動詞の使い方 概論</p> <p>「4通り」の使い方がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自動詞 他動詞は「使い方」の区別であって、各基本動詞が持つ「固有の使い方」の違いではない。</li> <li>・自動詞の使い方は「主語 S)のことを叙述」している使い方。</li> <li>・他動詞の使い方は「対象語 O)のことを叙述」している使い方。</li> </ul>	<p>●get の 自 他動詞の4通り)の使い方</p> <p>基本動詞の使い方は「4通り」に集約される。</p> <p>自動詞 他動詞の使い方の区別 = 2通り</p> <p>具体的な内容」か 補助的な意味」かで = 2通り</p> <p>各々が組み合わさって使われるので、2通り×2通り= 4通りになるが、どの形も SVOPのパターンで意味を作っている。</p>	<p>今の解釈では「getにたくさんの意味がある」と説明している(辞書を参照)。しかし、getのような基本動詞は「変化の様子」しか表しておらず「getの後ろの言葉」が意味を作っている。</p>
9 Verb ②	<p>●自動詞の使い方：2通り</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①具体的な行為を表している 自動詞の使い方」</li> <li>② 補助的な動きの様子」を表している 自動詞の使い方」</li> </ol> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どちらの場合も 動詞の後ろの言葉」が中心の意味を表している。</li> </ul>	<p>・自動詞の使い方しかない動詞 非常に少ない：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・be、go、come は自動詞の基本ロジック</li> <li>・自 他動詞の両方の使い方をする動詞が多く、ほとんどの基本動詞は「自動詞の使い方」をする：判断語としての意味を決めている言葉は、動詞の後ろの 名詞、形容詞、副詞、前置詞句」などの言葉。</li> <li>・自動詞の使い方も S-V-O-P</li> </ul>	<p>動詞が意味の中心」になっているような解釈をするので、基本動詞の使い方が文法的に説明ができなくなるので、熟語(イディオム)「慣用表現」と言わざるを得なくなる。</p>
10 Verb ③	<p>●2通りの他動詞の使い方</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①具体的な行為を表す 他動詞の使い方」</li> <li>② 補助的な動きの様子」を表す 他動詞の使い方」= どんな動詞でも「使役の意味」になる。</li> </ol> <p>★どの場合も対象語(O)の後ろの言葉が意味を作っている。</p>	<p>代表的な他動詞の使い方 make、do、take、bring、have、want、play、fly、drive</p> <p>補助的な使い方は、対象語(O)の後ろの言葉[叙述語(P)]が文の意味を決める。</p> <p>・対象語(O)の後ろ叙述語(P)には、形容詞や名詞、前置詞句、副詞などが使われる。</p> <p>叙述語(P)で使う言葉に品詞の制限は無い。</p>	<p>・目的語(O)の後ろの言葉を、目的格補語(OC)」とか「前置詞句や副詞」を「修飾語(副詞[句])とバラバラに呼んで「牙マケの情報」としている。実は、英語は最後の言葉が「重要な情報」になっている。</p>
11 Verb ④	<p>●haveの 他動詞の使い方」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他動詞の使い方の基本は、haveである。</li> <li>・have +目的語(O) +□□(いろいろな言葉)</li> </ul>	<p>●叙述語(P)で使う言葉に品詞の制限は無い。</p> <p>have+目的語+[ be ] +形容詞</p> <p>get +目的語+[ be ] +名詞(haveは使わない)</p> <p>have+目的語+[ be ] +副詞</p> <p>have+目的語+[ be ] +前置詞句</p> <p>haveは「OがP(V2+□□) という状態にする」という使役の意味で使っている。</p>	<p>通常 have +O+OC」と説明されているが、OCにあらゆる種類の言葉が使われているので、補語(C)と呼べない副詞や前置詞句もOCの部分で使っている。</p>
12 Verb ⑤	<p>●組み合わせた判断語(V)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・動詞+□□ は自動詞の使い方</li> <li>・動詞+目的語(O) +□□は他動詞の使い方</li> <li>・自 他動詞の両方の使い方をする動詞がたくさんある。</li> </ul>	<p>・動詞+□□は自動詞の使い方</p> <p>・動詞+目的語(O) +□□は他動詞の使い方</p> <p>基本動詞 get、make、run、give、take、put、setなどは、□□(いろいろな言葉)と組み合わせ意味を作るが、□□が「意味の中心」を表し、動詞は、「変化の様子」を表している。</p> <p>句動詞と呼ばれる「動詞+□□」の組み合わせた使い方は「自動詞の使い方」でも「他動詞の使い方」でも使われる。</p>	<p>通常「熟語(イディオム)」とか「慣用表現」と呼んで、文法の埒外にしている。</p> <p>組み合わせるという英語の基本ロジックで使われている。</p> <p>熟語(イディオム)と呼ばれる使い方は、英語の基本ロジックで使われている。</p>

Unit	テーマ	内容 :	対応する既存 文法事項と問題点
13 Verb ⑥	●基本動詞の使い方のまとめ  ・基本動詞の使い方は、S-V-O-P という語順にあてはめて使っている。	動詞によって使い方が決まっているのではない。 ・動詞の使い方が予め4通りあり、その枠に言葉をあてはめて使っているだけ。 ・自動詞 他動詞の使い方の違いで「2通り」 ・具体的な意味か補助的な意味かで「2通り」 ★重要な点は、O-[V1]-P が「文の中心の意味を表している」ということである。S-V は、O-[V1]-P に対して「話し手の判断」を表しているだけ。	「五文型に分類」という考え方で、特定の動詞を「文型で使う」というような刷り込みでしまう。 辞書を引けば分かるが make、get などの基本動詞はあらゆる文型で使っている。
14 be+活用した動詞 ①	●活用した動詞の使い方： 動詞の活用形は4種類 ①doing ②done/ -ed, ③to do ④a do  be □□ と have □□ で組み合わせて判断語(V)にする。	VSOP英文法では「動詞の活用形」を、to do、doing、done/ -ed と a do の4種類と考え、各々の活用形は「その形が表している意味」の違いだけで、be や have と組み合わせて主語の後ろの「話し手の判断」を表していると考え。これにより「あらゆる種類の言葉」が「品詞の制限なく話し手の判断」で使われていることを説明する。	「活用した動詞」は通常「準動詞」と呼ばれ、「進行形」「受動態」「be to do」構文」というようにバラバラに考えている。また、to do と a do の形が、現在分詞形や過去分詞形と同じ使い方だと気づけなかった。
15 be+活用した動詞 ②	●S is doing . 現在分詞の使い方(進行形)  doing の正確な意味を理解しよう。	doing は、ある動作・状態が「始まって→しばらく続いて→そのうち終わる⇒繰り返す」という4つの意味を内包している動詞の活用形。 ・起⇒承⇒結⇒繰り返しのいずれかの意味で使っている。 ・英語の現在形は常に「事実的状态を表す」のに対して S is doing は「動詞の種類に限らず」で「その時の行為」を表している。	通常「進行形」は「その時の行為」の使い方が最初に教えられるので「これから起きることになっている」「近接未来」の使い方の理解が不足。また「状態を表す動詞」は「進行形にしない」と覚えると、日常英語は使えなくなる。
16 be+活用した動詞 ③	●S is done/-ed 過去分詞の使い方 ① 受身(受動態)の意味なる理由  have done/ -ed との比較 be done/ -ed の「完了形」	S is done/-ed : done/-ed は「既に～に状態になっている」という意味を表す。 be と組み合わせると「～されている」という受け身の意味の「話し手の判断」となる。「～し終わっている」という意味を使うこともある。 have との組み合わせると「もう既に～になっている」という「完了」の意味になる。	S is done/-ed は「受動態」され、受け身の意味しかないように教えているが、S is done/ -ed で「完了」の意味になる表現がたくさんある。また、気持ち・感情の表現が何故受け身になるか適切に教えていない。
17 be+活用した動詞 ④	●S is to do to do の本来の意味：「必ず」～する」で使っているので「	S is to do :「これから必ず～することになっている」という意味の「話し手の判断」を表す。 他の動詞の活用形が be と組み合わせた場合と同じ使い方になっている。 これにより to-不定詞の使い方の理解がとても簡単になる。	通常「be to do」の構文」と呼び、文法の罅外に置いて、「予定、義務、可能、意図・願望、運命、目的などを表す」とされる。「構文」にするので、to-不定詞の使い方が分かりにくくしている。
18 be+活用した動詞 ⑤	●S is a do a do は「動詞の活用形の一つ」 ・「一回～をする/もの」という意味で使う。	be a do :動作や行為を「1回する人物・事柄」として表している。 動詞に a/an/the (冠詞)を付けた a do」は、他の動詞の活用形と同じように、S is a do. で使う。 have a do や make a do、take a do、give a do など「英語の組み合わせロジック」である。	a do は今の解釈では、ほとんど説明されていない。そのため熟語(イディオム)だらけになってしまった。 基本動詞は a/an/the を付けると名詞に換わる」

Unit	テーマ	内容	対応する既存文法事項と問題点
19 be + 活用した動詞 ⑥	●主語の後ろの説明語② 活用した動詞のネクサス 名詞-[ V1 ]- V2 - O 名詞-[ be ]- doing - O 名詞-[ be ]- done - O 名詞-[ be ]- to do - O 名詞-[ be ]- a do - O	活用した動詞も be を抜いて使うと、名詞の説明語になる。さらに、この語順で、他動詞の使い方の時の目的語(O)に対する叙述語(P)としても使う。 英語のネクサス :名詞-[ be ]-V2-O-[P] 名詞の説明語に品詞の制限が無いのと同じように、叙述語(P)に使う言葉にも、品詞の制限は無い。 他動詞の使い方のネクサス :S-V-O-[ be ]-P	名詞の後ろの説明語を「後置修飾」とか「形容詞用法」と呼んでいる。この定義に従うと「あらゆる種類の言葉が形容詞句」となってしまう、品詞の定義が意義を持たない。
20 have + いろいろな言葉 ①	●have + □□の使い方 have + 具体的な名詞 have + 抽象名詞 have は英語の動詞の中で1番多く使われる言葉。 have を適切に使えるよう、ロジックを理解しましょう。	have + □□ : □□がある」という意味を表す。 have to do : 「これから必ず～する必要がある」 have a do : 「一回～をする」 have done : 「終わった状態である」 have 抽象名詞 : 「抽象名詞の状態がある」  どのような言葉を使ってもhaveの意味 働きは同じ。	have の後ろの言葉が「具体的な名詞＝人／物」にしか説明しない。抽象名詞が使われる場合は文法として説明せず「熟語(イデオム)」「慣用表現」と暗記事項とする。
21 have + □□	● have done/-ed 1回目	have done/ -ed は「し終わった状態を今持っている」 ⇒ 「終わった状態である」 be done/-ed でも同様の意味を表す場合がある 他の動詞との組み合わせと同じように、have とdone/ -ed が組み合わせられているだけ。 完了「結果、経験、継続」というように区別は、have done/-ed 以外の部分、中位「Mid」の言葉か「叙述語(P)」の内容によらなくてはならない。 完了形」という英文法用語自体が日本人には「過去のこと」のように思いがちだが、「have done/-ed」は「今の状態を伝えている表現」である。	通常「完了形」と呼んでいるが、この形を学習始めに「完了 結果、経験、継続」と無理に分類しようとするので、大きな混乱が起きる。文意が分からなければ分類はできない。
22 have + □□	● have done/-ed 2回目		
23 Verb + □□	●Verb done/ -ed have done/-ed の組み合わせに非常に似ているが、done/ -ed の意味は異なる。	動詞 + done/-ed」の組み合わせは、done/ -ed が受け身の意味を表し、動詞は「補助的な判断」を表している。組み合わせで意味を作る」という英語の基本ロジックによって使われている。 この時、have 以外の組み合わせでは、done/ -ed は、受動的な意味になり、have と組み合わせた、場合だけ能動的な意味になる。	動詞 + done/-ed」の組み合わせはあまり説明していない。動詞の後ろの「done/-ed」を「補語」と呼んでいるので「形容詞」と説明されるので用語の混乱が起きる。
24 Verb + □□	● [do] Verb doing ・ be □□ doing ・ have □□ doing  これらは、「[V1 + V2] + doing」という組み合わせで使われている。	判断語(V)の後ろでdoingを使うとdoingが判断の中心で、前で使っている判断語(V)の部分は「補助的な判断」の働きになる。この場合のdoingも「ある動作・状態が「始まって→しばらく続いて→そのうち終わる→繰り返す」というdoingの本来の意味を含意している。	Verb doingの形のVerbは他動詞で、doingは目的語とされ「動名詞」と呼ばれている。これだと「自動詞 + doing」は説明できないので教えていない。
25 Verb + □□	● [do] Verb of doing ・ be □□ of doing ・ have 名詞 of doing 前置詞の後ろの doing」	判断語(V)の後ろで「前置詞の後ろで doing -O-[P]」が使われている場合は、全体で「対象語(O)」を形作っている。対象語(O)の内部に「[V2-O-[P]」の構造」が組み込まれて、まとまった一つの意味を作っている。	前置詞の後ろは、動名詞」と機械的に説明しているので、その中に構造があることになかなか気が付かない。

概論編プログラム Part ⑤

Unit	テーマ	内容	対応する既存文法事項と問題点
25 Verb+ □□	<ul style="list-style-type: none"> <li>● [do] Verb of doing</li> <li>・ be □□ of doing</li> <li>・ have 名詞 of doing</li> </ul> 前置詞の後ろの doing	判断語(V)の後ろで 前置詞の後ろで doing - O-[P]が使われている場合は、全体で 対象語(O)を形作っている。対象語(O)の内部に「V2-O-[P]」の構造」が組み込まれて、まとまった一つの意味を作っている。	前置詞の後ろは、動名詞」と機械的に説明している、その中に構造があることになかなか気が付かない。
26 Verb+ □□	<ul style="list-style-type: none"> <li>● [do] Verb to do、</li> <li>・ be □□ to do、</li> <li>・ have 名詞 to do</li> </ul> これらは、「V1 + V2」 + to do」という組み合わせで使われている。	to do の前で使われている判断語(V)は 補助的な判断」を表している。 to do の前では、いろいろな品詞の言葉を使っている。つまり、現実の英語では品詞の制限は無いのである。品詞で区別せずに 判断補助語 + to do」という組み合わせ方になれることが重要である。	「to-不定詞」と呼ばれ、名詞 副詞 形容詞の3用法がある」と説明されているが、これらの用法にあてはまらない表現がたくさんあり、それらは 熟語(イディオム)又は慣用表現」とされている。学習者が混乱する文法事項の一つになっている。
27 Verb+ □□	<ul style="list-style-type: none"> <li>● [do] Verb to do と [do] Verb doing の意味の違い</li> </ul>	to do 「必ず」～する」で doing は 「～している」という意味で使っている、前の動詞との組み合わせ方は、それぞれの 活用形の意味の違い」を理解していれば簡単に分かる。 動詞の意味の違いで組み合わせ方が決まっている。	動詞の後ろのto-不定詞は 名詞的用法」、動詞の後ろの doing は 動名詞」というように 名詞」と呼ぶだけなので、意味の区別を考えなくなる。
28 Verb+ O+ □□	<ul style="list-style-type: none"> <li>●基本動詞のS-V-O-P 補助的な他動詞の使い方」。</li> </ul> S-V-O-Pの典型的語順。 Pで 活用した動詞」を使う。 Pが意味の中心を作っている。 日本語の 述語」になっている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>● S-V-O-[ be ] -P(□□-O-[P]).</li> </ul> Pで活用した動詞を使う ・S-V-O-[be] - doing - O. ・S-V-O-[be] - to do - O. ・S-V-O-[be] - done/-ed - O. ・S-V-O-[have] - a do - O. <ul style="list-style-type: none"> <li>●対象語(O)を主語として いろいろな言葉」をPで使う。</li> </ul> OとPの間に、判断詞(V1)が抜けて(ネクサス)、O-[ be ]-Pで 「一つの文」を作っている。 S-V-O-[V1]-P.  Sが-Vするのは- {O が P になるように}です。 P に品詞の制限は無い。	第5文型 :S+ V+ O+OC と呼んでいるが、目的格補語(OC)の部分に 名詞 形容詞 副詞 前置詞句 to-不定詞 現在分詞 過去分詞 節を使う」としている。主格補語(SC)は 名詞 形容詞」と説明しているので定義矛盾が起き混乱する。 have、get、make、let、のように目的格補語(OC)で 動詞の原形」を使う動詞を 使役動詞」と呼んでいるが、目的格補語(OC)で他の品詞の言葉が使われても 使役に意味」で使っている。

● 自動詞の使い方」も 他動詞の使い方」も、S-V-O-Pという語順に集約される。

